

## 看護職のキャリア開発に関する一考察 看護師が語るキャリアからの分析

立命館大学応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
家族機能・社会行動クラスター

近年、多くの企業で終身雇用制がゆらぎ、能力主義を導入するなど従来の雇用環境が変わりつつある。既存の働き方、組織・雇用形態が変化しているなかで、個人は自分のキャリアに責任を持ち、自らのキャリアを自ら切り開いていく必要があると指摘されている。

看護職においても、近年の急速な少子高齢化の進行、医療の高度化・専門化の進展、介護保険制度の実施、医療へのニーズの高まり等の中で、医療制度の抜本改革が議論されるなど看護職を取り巻く現状も大きく変化しているところである。この変化に看護職一人一人は専門職としてその能力を高めることに努めなければならないといわれている。

本論文では、看護職のキャリア開発が、看護職個人の自己責任でキャリアをデザインしていくこととされている点から、個々の看護師がどのようにキャリアを歩んでいるのか、彼女たちの語りからキャリアの現実をみていくことを課題にした。

対象者は臨床経験10年以上の看護師である。質問項目は、異動や昇進などのキャリアの経時的変化とその変化をどのように感じたのかを聞いたものである。

面接調査の結果、実際の職業経験のなかでは、自分の意向に反して就職先が決められていたり、仕事を始めてからも適材適所という理由で異動が命じられることなどがあった。自分ではキャリアを描きにくい現実がみられる中で、成功感や有能感が形成されるなどポジティブな条件がキャリアの形成を促していた。

そして、どのような支援が望ましいのかを、基礎教育課程からのキャリア教育、柔軟な昇進・異動、転職の支援、看護職の意識改革という点から課題を提示した。キャリア開発の支援を進めるにあたっては、病院や診療所等の施設で働いている看護職者を支援するだけでなく、看護職として職業の定着を考慮した支援が必要なのではないかと思われる。さらに、今後は、実際のキャリア開発プログラムとそれがどのように個人のキャリア開発の過程に影響するのかについても考察していきたいと思う。